復刻版

夕刊 新大阪

THE NEW OSAKA, 1946-49（昭和二一年一月～二四年一二月）

全10巻
別冊1

推薦者
田辺聖子
谷沢永一
山内祥史
山本武利

戦後の昂揚期に一閃の光芒を放った〈夕刊流星号〉は、大新聞の古い秩序を破壊し、焼け跡を猛烈な速度で疾走した。大阪庶民の生々しい世相を反映し、占領期文学の宝庫と目される第一級資料が、詩人・足立巻一氏旧蔵の原紙で今甦る！

★

不二出版

体裁――A3判・上製・総二、八三二頁
別冊――解説＋主要記事索引
解説――浦西和彦〈関西大学文学部教授〉
揃定価――三〇〇、〇〇〇円＋税
刊行――第一回配本（二〇〇六年十月）一五〇、〇〇〇円＋税
　　第二回配本（二〇〇七年五月）一五〇、〇〇〇円＋税
発行――新大阪新聞社
原本提供――兵庫県立図書館

復刻の辞

『夕刊新大阪』は一九四六年二月四日に創刊された横長のタブロイド判夕刊紙である。発行所は西区阿波堀通の新大阪新聞社、編集兼印刷発行人は元東京日日新聞（毎日新聞の前身）の学芸部記者で、「長崎物語」の作詞家としても知られる黒崎貞治郎であった。

不安と希望が入り混じる、戦後間もない大阪の地において、民主主義を根本理念とし、権力に屈せず、市民に活力を与え、生活を向上させていくことを発刊の主旨としたのである。

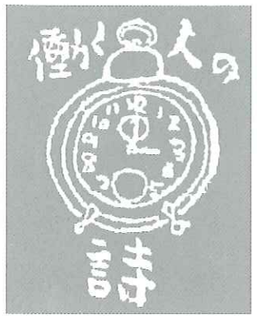
大新聞には文化欄がほとんどないと言っていい時期に、本紙は投書欄と学芸欄さらにはスポーツ欄に大きなスペースを割き、文化新聞として独自の地位を築いていく。〈闘牛大会〉、〈欧州名作絵画展〉、〈人間復興講座〉、〈日本交響楽団〉等の斬新なイベント企画で京阪神の読者を魅きつけた。また学芸欄には武田麟太郎、石川達三、大仏次郎、田村泰次郎らが連載小説を発表し、地方紙でありながら全国レベルの多くの作家が文芸批評や作品を寄稿している。

「横新聞」の愛称で大阪の市民に愛され親しまれたこの新興夕刊紙は、敗戦直後の庶民の世相を色濃く反映する第一級の資料として大変貴重であり、占領期文学研究の宝庫でもある。

復刻版に使用した原紙は詩人・足立巻一氏（一九四六年～一九五六年に新大阪新聞社に勤務して、学芸部長、社会部長、編集総務を歴任）が旧蔵されていたものである。

小社では新大阪新聞社及び原紙保存先の兵庫県立図書館の全面的な協力を得て、創刊号から全盛期に至る一四一六号（昭和二四年一二月三一日）までを復刻し、主要記事索引を付し、近現代史の研究者に広く提供する次第である。

不二出版



夕刊新大阪主要執筆者一覧

青野季吉　赤松常子　秋田実　阿部能成　荒正人　有島生馬　安西冬衛　飯島正　石川達三　石坂洋次郎　板垣直子　井上吉次郎　井上靖　岩上順一　岩崎昶　梅崎春夫　瓜生忠夫　江戸川乱歩　大河内一男　太田典礼　大山定一　岡本太郎　小川未明　荻原井泉水　尾崎士郎　尾佐竹猛　大仏次郎　小田切秀雄　織田作之助　小野十三郎　折口信夫　海音寺潮五郎　賀川豊彦　片山敏彦　勝目テル　加藤静枝　神近市子　河盛好蔵　上林暁　木々高太郎　菊田一夫　木下恵介　草野心平　小磯良平　小林秀雄　今和次郎　斉藤茂吉　坂口安吾　佐々木信綱　佐多稲子　サトウ・ハチロー　佐藤春夫　里見弴　椎名麟三　志賀直哉　志賀義雄　芝木好子　柴田錬三郎　子母沢寛　庄野英二　新村出　杉村春子　杉山平一　鈴木安蔵　住谷悦治　千田是也　高浜虚子　高見順　高群逸枝　滝川幸辰　武田麟太郎　竹中郁　田所太郎　田中絹代　田中澄江　田辺繁子　谷川徹三　田村泰次郎　土屋文明　壷井繁治　坪田譲治　徳永直　豊島与志雄　長沖一　中島健蔵　中野好夫　中村光夫　長与善郎　新居格　丹羽文雄　野田又夫　野間宏　長谷川伸　花田清輝　日夏耿之介　火野葦平　日野草城　平林たい子　福田恆存　藤沢桓夫　伏見康治　布施辰治　舟橋聖一　古谷綱武　牧村史陽　正宗白鳥　真杉静枝　三岸節子　三島由紀夫　水原秋桜子　美濃部達吉　宮城道雄　三宅周太郎　宮本百合子　三好達治　武者小路実篤　村山知義　室生犀星　毛利菊枝　森田たま　柳宗悦　柳田国男　山岡荘八　山川菊栄　山口誓子　山室民子　山本安英　吉井勇　吉川幸次郎　吉屋信子　米川正夫

『夕刊新大阪』創刊号・「人民評論」［社説］（昭和21年2月4日号）

『夕刊新大阪』創刊

井上吉次郎

人民評論

新しい世界の通行に新しい新聞が要る。新酒は古い革ぶくろに入れるものでない。ここに敗残から立直る新日本の一旗手として「夕刊新大阪」を発足させる。

新日本といつても、それは輝かしいどころのものでない。我々は十年の戰爭に打ちのめされて了つた。慘怛たる敗北に変り果てた姿になつた。恐らくは有史以來最大の変革に際したといへよう。しかし、我々は事のここに至つた次第を段々に知つて來た。如何に戰爭が起されたか。如何に戰はれたか。しかして敗れたか。眞相が漸次摑まれて來た。眞相を摑めば過ちを悟る。過ちを悟れば立直る眞道を知る。

斯の道は簡單だ、かつ明瞭だ。民主主義を徹底させるだけのことだ。專制主義が國家をこのドタン場へ持つて來たんだからこの是正は百八十度の轉法輪で民主主義にきまつてゐる。問題はないんだ。問題は如何に民主主義を徹底させるかにある。戰爭を契機として革命の成就される歷史の法則に、ここにも例外はなかつた。独裁か民主か、歷史の大場において結論に達した。

われわれの直面する困難は数限りない。飢餓の瀬戸際に立つて、敗戰者の巨大なる責務を負はなくちやならない。この棘の道は、ちつとやそつとの勇氣で踏み渡れない。民生の問題は一層切実だ。崩壞した國民生活を再建する忍苦は辛い。

國民をこの不幸のドン底に陷れた因子は解剖され、急速に除去されゆく。軍閥は拂拭される。財閥は解体される。官僚は制壓される。

しかし、植る込まれた惡の根は形あるものの破壞だけで、忽ち消されてしまふやうなものでない。変革の完遂には反対勢力を確立する一途だ。民主主義に心の底から入換へてしまふほかない。しかして、一朝一夕でやれることでない。

けれどもかう見極めがつけば一道の光明が射す。敗残の國家の背後をなす日本社會は、脈々たる生命を保存する。社會大衆は、その生命力の故に、國家再建の希望を湧かす。元の强大なる軍國を再興しようといふのでないから、我々の希望は空想でない。世界の余他の國々が待望する線に沿つて、我々の國家生活を立直さう、といふ希望は達成される。

これは社會大衆の間に、むくむくと湧き上つて來た要望だ。この澎湃たる社會要望に應へて我々の新聞が進発した。

われわれは基地をこの社會大衆の要望に置きたい。立場を社會大衆に求める。故に如何なる党派の機関でもない。保守勢力は當然にわれわれの排撃するものである。新日本の希望達成を邪魔する何物も、残りなく破壞しよう。希望達成の線に乘る一切のものと手を携へよう。特に或る一派と抱合するやうなことはしない。

われわれの報道は鮮新だ。われわれの態度は清明を期する。われわれの感覚は敏活でありたい。由來民權は西日本から伸展される。われわれは、西日本社會大衆の間に湧き起つた新日本再建の活發な要望に呼應して立つた。特に在來多く封建的勢力の影響下に置かれた婦人の自覚と地位の向上のために、われわれの努力を拂ひたい。また勤勞階級、中小商工業者の代弁者たらんことに関心を持つ。これは派別でない。社會大衆のなかんづく顯要なる種類だ。「夕刊新大阪」は、國民大衆の生活確保の機関として、平和新日本成就のために、新しく生れ出たのである。堂々とやつてゆかう。

（筆者は本社主筆）

第一号　一九四六（昭和二十一）年二月四日
『夕刊新大阪』創刊（＊人民評論）　井上吉次郎　1
ひとで(1)～(49)（＊小説。画・小磯良平）武田麟太郎　1
＊三月三十日（第59号）まで四十九回連載
戰災は苦にしない――これからの大阪　八木　秀次　2
新しい大阪の女性に――批判的な精神を持つこと
（＊婦人）
現代アメリカ文学抄(1)　藤沢　桓夫　2
桑島　健一　2

第二号　一九四六（昭和二十一）年二月五日
文化人と『時代』　石川　達三　2
無責任な啓蒙家排せ――家族主義の清算について
（＊婦人）　古谷　綱武　2
現代アメリカ文学抄(2)　桑島　健一　2

第三号　一九四六（昭和二十一）年二月六日
現代アメリカ文学抄(3)　桑島　健一　2

第四号　一九四六（昭和二十一）年二月七日
大阪文学の動向(1)――出版について
赤本商売から離脱――自らの文学、作家を育てよ　長沖　一　2
摑まれたペンを執り上ぐのみ――新しい俳句の解放について　日野　草城　2
作家の生活擁護に、文と家協会、起つ――生活困難な者に無利子貸出し（＊記事）　無署名　2

第五号　一九四六（昭和二十一）年二月八日
子供に本を与えよ　大蔵　宏之　2
大阪文学の動向(2)――作家について
現れよ新しい『西鶴』――帰還の人々に期待　長沖　一　2

第六号　一九四六（昭和二十一）年二月九日
詩の行方――民衆に理解し易く、香り高く、諷刺的

別冊・主要記事索引見本（原寸の68%に縮小）

〈夕刊流星号〉こと『夕刊新大阪』の復刻を待望し、祝う

田辺聖子〈作家〉

〈夕刊流星号〉の創刊は一九四六年である。その名の如く、戦後まもない混乱時代に流星の如く出現した、新興の夕刊新聞だった。当時は占領軍アメリカの政策で、全国紙の大新聞は、夕刊発行をさしとめられていた。その物足らぬ浪花の空に〈流星号〉は花々しく舞った。紙型が横型だった、というのも人々の意表を突く、斬新なアイデア。――敗戦という、未曾有の災厄に呆然としている大衆には、その型やぶりな新聞は、快いショックだった。むろん、内容も。……新しいその夕刊新聞の、作り手の目標は、〈ロンドン・タイムズ〉だったという。日本の〈ロンドン・タイムズ〉を作るのだ、と記者たちは燃えていた……。

実は、これらの知識を、私は、詩人・足立巻一氏のご著作『夕刊流星号――ある新聞の生涯』（新潮社刊。一九八一）から得たのである。〈流星号〉の誕生から消滅まで描かれた。著者はあとがきに、「なるべく事実に即するようにつとめたが、誇張や虚構を加えた個所も少なくない」としるされているが、それでも、戦後の昂揚期に、新しい新聞をたちあげようと、清新な情熱を燃やした人々の姿、そして、時代の風にひるがえる旗のような、新興新聞に、興味と関心を持たずにいられなかった。私は〈夕刊流星号〉を読みたい、と切望したが、すでに見るべくもない過去となっていた。――しかしながら、〈流星号〉と愛称された『夕刊新大阪』がこのたび、復刻された。戦後すぐの庶民の、生命力あふれるたたずまい、世相のうつりかわりが目前に再現される。まさに時代と民衆と世相の、なまなましい一級資料である。よみがえった〈流星号〉の復刻を大いなる期待で迎えたい。

升田が木村を倒した

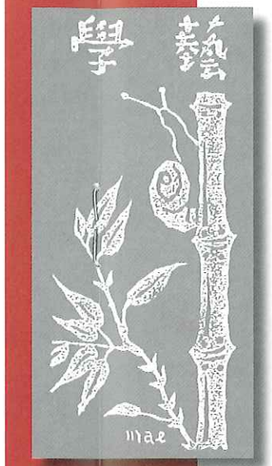
谷沢永一〈評論家〉

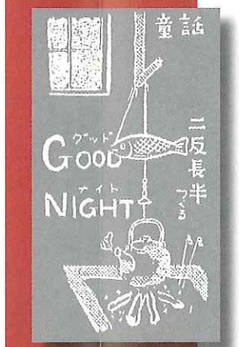
無敵、と言えば、横綱双葉山と木村義雄名人、と相場が決まっていた。赤紙を受けてポナペ島に行っていた六年間、木村さんと一局さしたいと、そればかり考えていた升田幸三七段がようやく帰国する。名人位に挑戦できるのは八段のA級優勝者という規約がある以上、二十九歳の升田には、十年不敗を誇る四十三歳の木村名人と正式に対戦する資格がない。その二人をはじめて掛け合わせたのが『夕刊新大阪』である。

宝塚の料亭〝さくら〟でおこなわれた第一局から三タテに升田が勝った。双葉山が安芸ノ海に敗れたのと同じく将棋界の一大事件である。その棋譜を連載した『夕刊新大阪』の果敢な企画の得意や思うべしである。

紙面の特徴は二面にあった。投書とスポーツと学芸欄である。創刊からの小説は武田麟太郎の「ひとで」。挿絵は小磯良平に依頼した。のち田村泰次郎の「今日われ欲情す」が人気を集める。井上靖の小説で知られる闘牛、昭和二十二年四月の「欧州名作絵画展」、日本交響楽団をはじめて大阪に呼び、辻久子を後援するなど、弾みのついた陽気な姿勢が、戦後の大阪をどれほど華やかに盛り上げてくれたことか。

ほとんどの出版新聞社史を通覧したけれど、『夕刊新大阪』の盛衰を、関係者の人物像に視線を当てながら描いた足立巻一の『夕刊流星号』（昭和56年）ほど、時代の息吹きを伝える臨場感に優るものは見出せなかった。





上記3つの絵図は紙面掲載の挿絵

充実していた『夕刊新大阪』の学芸欄

山内祥史〈神戸女学院大学名誉教授〉

この度覆刻される『夕刊新大阪』は、一九四一年二月から一九四九年末までだという。敗戦後まだ間もない不安と混迷の時期の新聞といってよい。一九六三年頃から、大阪の多くの図書館に通ったが、この時期の『夕刊新大阪』を見ることはなかった。その頃生まれた長男が、一九八五、六年頃から織田作之助作品の初出の入手に熱中し、頻りに諸方の図書館に通った一時期がある。やがて、兵庫県立図書館で『夕刊新大阪』のマイクロフィルムを発見し、小説一篇、随想三篇の初出複写を入手できたと欣んでいた。私が『夕刊新大阪』を見るために、兵庫県立図書館を訪れたのは、その後一、二年も経ってからだったろう。一九四八年分を借り出し、時間を忘れて、夕暮れ時まで見たのを記憶している。学芸欄が充実していて、文学的な文章が多かった。際立って印象深かったのは、「菊池寛を悼む」の久米正雄、吉川英治、吉屋信子による特集、「太宰治の死」についての柴田錬三郎、豊島與志雄、堤重久の諸稿で、その他、梅崎春生、井伏鱒二、三好達治、小林秀雄、上林暁、大岡昇平など、全集の刊行されている著名な文学者の文章が多く見られた。新大阪新聞社主催の「聴く文庫」の講演会での、小林秀雄「私の人生観」の要旨も掲げている。これら貴重な資料が、ここに眠っているのは惜しい気がし、熱心な研究家達にも報らせた。過酷な歴史の変動期に、新たな文明を創り出してきたこの『夕刊新大阪』の覆刻版上梓が、この度、浦西和彦氏の尽力によって実現したことを心から悦びたい。

「孝藝」のコーナー。記事は昭和22年1月27日号

『毎日』のダミーでなかった特色ある紙面

山本武利〈早稲田大学教授〉

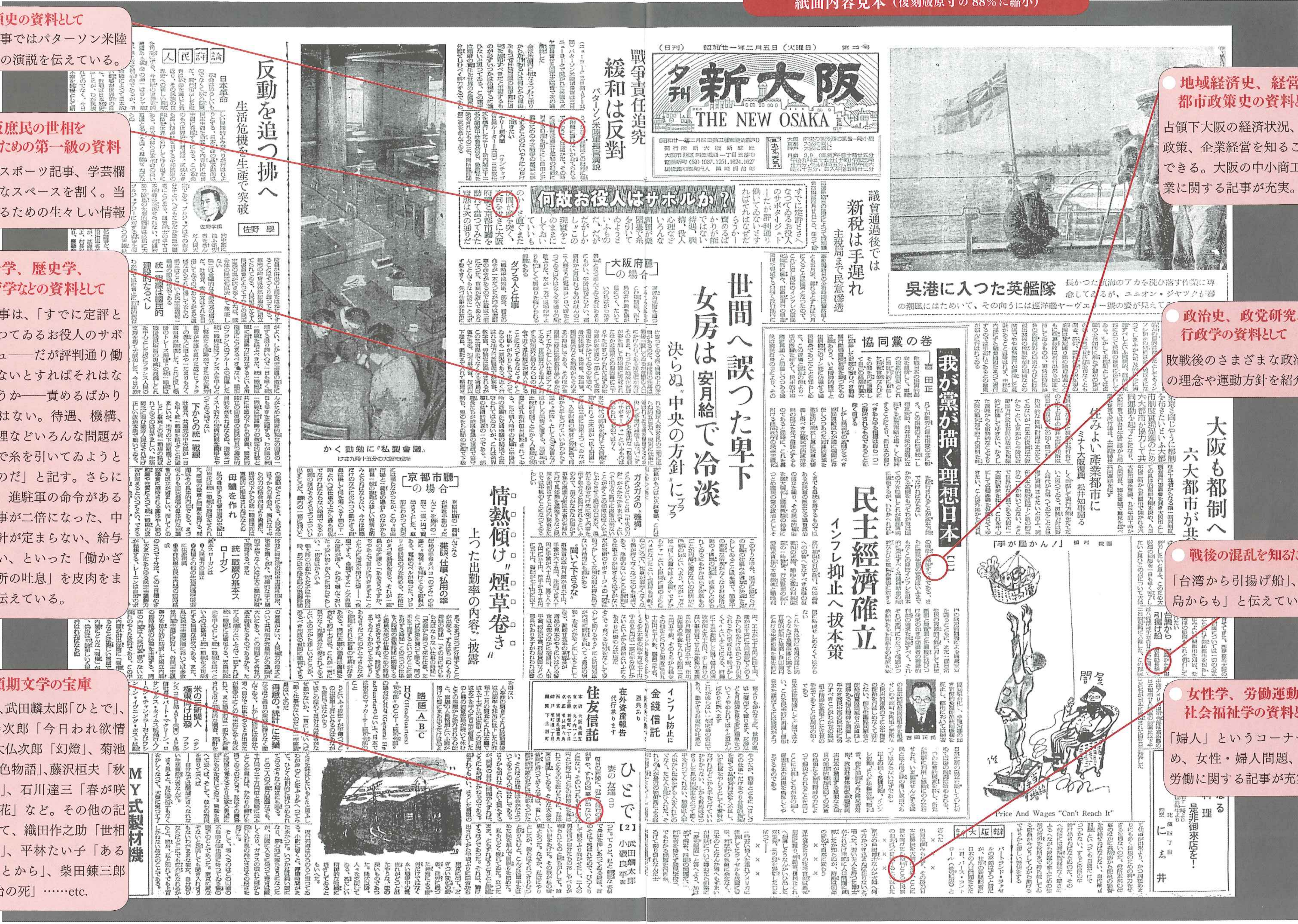
占領初期、大新聞の戦争責任が大きいと見たGHQは全国紙や県紙などへの用紙配給を制限する政策をとった。したがって大新聞の多くは朝刊二頁の体制で、外地から引き揚げてきた社員や罹災社員を養わねばならなかった。一方、新興紙といわれる戦後創刊の新聞は過去のしがらみがないし、GHQに協力する新聞になると期待されて、用紙割当が優遇された。そしてこれら新興紙は既存の新聞と競合することの少ない夕刊紙となることを選んだ。

ところがGHQは大新聞系列紙であっても、それは排除しないことがまもなく分かってきた。そこで大新聞は別の題字で新興紙の分野に参入するようになった。この『新大阪』は『毎日新聞』の大阪での別働隊であった。同じように『大阪日日新聞』が『朝日新聞』、『大阪新聞』は『産業経済新聞』（現サンケイ新聞）の系列紙であった。独立系のめぼしい夕刊紙は『大阪タイムス』くらいであった。

一九四七年にGHQは「大阪の夕刊紙の新傾向調査」なるリポートを出しているが、『新大阪』は最大部数の朝刊紙『毎日』が動かす最大の夕刊紙と述べ、インフレや新政党などの問題を会社員、店員、労働者など中産階級むけにやさしく、興味深く取り上げていると評価した。実際、同紙には内容も見出しも親新聞にない魅力があったし、社員も独自な編集、営業活動を行って市場を開拓した。

昭和22年2月5日掲載の中村浩之による四コマ漫画

紙面内容見本（復刻版原寸の88％に縮小）



(日刊) 昭和廿一年二月五日（火曜日） 第三號

夕刊 新大阪 THE NEW OSAKA

反動を追つ拂へ 生活危機を生産で突破 佐野學

人民評論

戰爭責任追究 緩和は反對 パターソン米陸軍長官演說

かく勤勉に"私製會議"

何故お役人はサボルか？

大阪府廳の場合

京都市廳の場合

議會通過後では新稅は手遅れ 主稅局まで民意滲透

世間へ誤つた卑下 女房は安月給で冷淡 決らぬ"中央の方針"にブラブラ

情熱傾け"煙草卷き" 上つた出勤率の内容"披露

協同黨の卷 我が黨が描く理想日本

民主經濟確立 インフレ抑止へ拔本策

呉港に入つた英艦隊

住みよい產業都市に

大阪も都制へ 六大都市が共

「手が屆かん！」

Price And Wages "Can't Reach It"

ひとで 【2】 武田麟太郎

住友信託

金錢信託 インフレ防止に

MY式製材機

●占領史の資料として

この記事ではパターソン米陸軍長官の演説を伝えている。

●大阪庶民の世相を知るための第一級の資料

投書とスポーツ記事、学芸欄に大きなスペースを割く。当時を知るための生々しい情報

●社会学、歴史学、教育学などの資料として

この記事は、「すでに定評とさへなつてゐるお役人のサボタージュ――だが評判通り働いてゐないとすればそれはなぜだらうか――責めるばかりが能ではない。待遇、機構、役人心理などいろんな問題が楽屋裏で糸を引いてゐようというふものだ」と記す。さらに記事は、進駐軍の命令があるので仕事が二倍になった、中央の方針が定まらない、給与が少ない、といった「働かざるお役所の吐息」を皮肉をまじえて伝えている。

●占領期文学の宝庫

連載は、武田麟太郎「ひとで」、田村泰次郎「今日われ欲情す」、大仏次郎「幻燈」、菊池寛「好色物語」、藤沢桓夫「秋草問答」、石川達三「春が咲かせた花」など。その他の記事として、織田作之助「世相と文学」、平林たい子「ある娘のことから」、柴田錬三郎「太宰治の死」……etc.

●地域経済史、経営史、都市政策史の資料として

占領下大阪の経済状況、経済政策、企業経営を知ることができる。大阪の中小商工業企業に関する記事が充実。

●政治史、政党研究、行政学の資料として

敗戦後のさまざまな政治政党の理念や運動方針を紹介。

●戦後の混乱を知るために

「台湾から引揚げ船」、「宮古島からも」と伝えている。

●女性学、労働運動史、社会福祉学の資料として

「婦人」というコーナーを始め、女性・婦人問題、出産、労働に関する記事が充実。

復刻版概要

夕刊新大阪

体　裁――全一〇巻＋別冊一・A3判・上製・各巻平均二八〇頁
内　容――第一号（昭和二一年二月四日）～
　　第一四一六号（昭和二四年一二月三一日）
揃定価――三〇〇、〇〇〇円＋税
別　冊――解説＋主要記事索引
　　別冊のみ分売可＝本体価格三、〇〇〇円＋税
　　ISBN4-8350-5736-8
解　説――浦西和彦〈関西大学文学部教授〉
刊　行――第一回配本（第一巻～第五巻）二〇〇六年一〇月
　　ISBN4-8350-5724-4
　　第二回配本（第六巻～第十巻・別冊一）二〇〇七年五月
　　ISBN4-8350-5730-9
推　薦――田辺聖子〈作家〉・谷沢永一〈評論家〉
　　山内祥史〈神戸女学院大学名誉教授〉・山本武利〈早稲田大学教授〉

◎配本概要

第１回配本＝2006年10刊月
第１巻　昭和21年　2月～　6月（1号～146号）
第２巻　昭和21年　7月～11月（147号～298号）
第３巻　昭和21年12月～22年4月（299号～447号）
第４巻　昭和22年　5月～　9月（448号～600号）
第５巻　昭和22年10月～23年2月（602号～749号）
ISBN4-8350-5724-4　セット価格＝本体150,000円＋税

第２回配本＝2007年5月刊
第６巻　昭和23年　3月～　6月（750号～871号）
第７巻　昭和23年　7月～10月（872号～993号）
第８巻　昭和23年11月～24年2月（994号～1112号）
第９巻　昭和24年　3月～　7月（1113号～1264号）
第10巻　昭和24年　8月～12月（1265号～1416号）
別　冊　解説＋主要記事索引
ISBN4-8350-5730-9　セット価格＝本体150,000円＋税

別　冊　解説＋主要記事索引
別冊のみ分売可＝本体3,000円＋税　ISBN4-8350-5736-8

欠　号
第８号（昭和21年　2月11日）
第11号（昭和21年　2月14日）
第56号（昭和21年　4月1日）
第601号（昭和22年10月1日）

既刊図書

サークル村　復刻版

全三巻＋附録一＋別冊一

収録内容
第一巻『サークル村』一九五八年九月～五九年六月・A5判　五二〇頁
第二巻『サークル村』一九五九年七月～六〇年五月・A5判　五四〇頁
第三巻『サークル村』一九六〇年九月～六一年一〇月・B5判　三二六頁
◎附録　B5判・五二六頁
『労働藝術』一九四八年七月（創刊号）
『地下戦線』一九五三年五月～一九五四年三月（一号～五号）
『炭砿長屋』一九五六年一月～一九五六年五月（一号～五号）

体　裁――A5判・B5判／上製／約一、九一二頁
別　冊――解説・回想・総目次・執筆者索引
　　別冊のみ分売可＝本体価格一、〇〇〇円＋税
　　ISBN4-8350-5720-1
解　説――井上洋子・坂口博・松下博文
回　想――上田博・加藤重一・河野信子・小日向哲也
定　価――本体六五、〇〇〇円＋税　ISBN4-8350-5715-5
推　薦――有馬学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔

関連図書

人民戦線　復刻版

全五巻＋別冊一

人民戦線社発行／中西伊之助主宰
〔昭和二〇年～昭和二四年刊〕

体　裁――A5判・上製・総一、七〇〇頁
別　冊――解説・総目次・索引
解　説――勝村誠〈立命館大学〉
　　秦重雄〈大阪府立成城高校〉
揃定価――本体六八、〇〇〇円＋税　ISBN4-8350-5737-6
推　薦――高柳俊男・西田勝
刊　行――二〇〇六年一〇月刊行

＊表示価格はすべて税別

不二出版
〒一一三－〇〇二三
東京都文京区向丘一－二－十二
TEL〇三－三八一二－四四三三
FAX〇三－三八一二－四四六四
振替〇〇一六〇－二－九四〇八四